

# 図書館

## —絶版の多い時代の研究の砦—

恒川 隆男\*

### 1

講義の準備であれ、論文を書くのであれ、あらかじめ自分で材料を集めてある場合は別とすれば、最初の頼りは何と言っても図書館です。書店に行っても、池袋のリプロや八重洲ブックセンターや紀伊国屋や丸善ならまだしもですが、何か役に立ちそうな本があるとは全然思えません —何しろ、並んでいるのは漫画、大衆小説、実用書、学習参考書が殆どで、多少知的なものといえば新書くらいなのですから。また、最近は便利になって、ネットで本を探して注文すれば、現在刊行されている本なら4日もしないで届けてくれます。けれども、必要な本で買えるものは驚くほど少ないものです。大抵は絶版になっているからです。こういうことはドイツでも —僕の専門はドイツ文学なのですが— あまり変わりません。買える本ならネットで検索できますし、航空便で注文すれば遅くとも10日くらいで届きます。買える本は日本より大分多いような気がしますが、それでも絶版が少ないとは言えません。

今年は文学概論の講義をすることになり、テーマの一つに〈神話〉というのを思いつきました。僕の頭のなかには〈神話〉と言えば、絶対的な力を持ったものを〈神話的なもの〉と呼ぶこと、〈神話的なもの〉にうっかりとでも関わり合いになると人間はいつも悲惨な反復行動をすること、

---

\*つねかわ・たかお / 文学部教授 / ドイツ文学

ということくらいしかありません。絶壁の上で歌っているサイレンに聞き惚れた船人が、誰も彼も印で押したように暗礁に乗り上げて溺れ死ぬようなものです。俺は大丈夫だろうと思っていてもそうはいかない。気がついた頃には唄が聞こえていて、凄いヌードの美人だなあと感心しているうちに、あえなく海の藻屑になってしまうのです。鹿爪らしく言えば、性的なものには誰にも抵抗できないような絶対的 ―神話的― な力があるということです。性的なものを抑圧しても、その誘惑はなくなるわけではないので、ノイローゼになったりするのです。政治権力もまた同じように絶対的な力を持つことがあります。アンゲロブーロスというギリシャの監督の『シテール島への船出』という映画は、ギリシャの寒村で住民たちが、どうにも立ち行かなくなった村の生活を建て直そうとして、村を観光会社に売ってスキー場を誘致しようとするところから始まります。その村に、かつて反ナチ・ゲリラ闘争をやっていた男がすっかり老人になってソ連から帰ってきます。彼は村人たちの計画に断固反対して、俺の土地は絶対に売らないと言い張って彼らを閉口させます。だが、彼らのリーダー格らしき男が彼に言うのです。〈お前一人のために村はいつでも迷惑するのだ。ナチの時だってそうだったじゃないか。〉たしかに、彼の言うことはわからないではありません。ゲリラがいるとなれば村人の一人一人が尋問されるでしょうし、そのくらいですめばまだしも、皆殺しにだってされかねません。映画のストーリーは、かつてナチに協力した人々は今度もスキー場を誘致しようとする人々であり、村の権力構造はナチ時代の構図をそっくりそのまま反復することになり、結局のところ、老人は村から追放されてしまうというふうに進みます。ラストシーンで、老人はどういうものか老妻と一緒に筏に乗って海に漂い出るのですが、そこへ通りかかったソ連の船は、かつては彼を助けてくれたのに、今度は、ここはギリシャの領海でありギリシャの主権を侵すわけにはいかないという ―これもまた尤もな― 理由をスピーカーで通告して、彼と彼の妻を見捨てて去っていきます。大江健三郎の『万延元年のフットボール』でも、政治権力との葛藤から、万延元年にも昭和60年代にも、村の庄屋の家の兄弟の一人が悲惨な運命に見舞われ、一人が体制に順応して生き延びます。アンゲロブーロスの場合も大江の場合も、政治権力は人間にコントロールできない ―つま

り、人間がまだ充分主権者になっていない— ことによって<神話的なもの>になり、それとの葛藤でいつも同じ構図の悲惨が反復されるのです。<神話的なもの>というこの考え方は、僕の智恵ではありません。フランクフルト学派と言われるヴァルター・ベンヤミン、テオドール・アドルノのテクストをかつて四苦八苦して読み、彼らはこういうことを言っているのだらうと思ったのにすぎないのです。それはともかく、文学概論の講義という現実的なことに戻ると、これでも1回か2回くらいは話ができるだろうかと、つい考えました。

それにしても、講義となるとあんまり偏ってもいけないし、ともかくも一応は<神話>について、世間の人々がどんなふう考えているのかを心得ておくにこしたことはありません。丁度うまい具合に、『神話哲学入門』という本が手許にあるのを思い出しました。目次を見ると古典古代から現代に至るまでの章があるのですが、何しろ講義の準備も—大きな声では言えないのですが— 差し迫ってのことなので、古いところは失礼して、<20世紀>の章と<現代>の章をまず読むことにしました。ところが<20世紀>の章を読んだだけで、愕然としたのです。<神話>というとまず未開民族の神話が取り上げられ、たとえば神話的な思考は論理的な思考なのかそうでないのかというようなことが問題になっています。すっかりショックを受けて慌てふためいてみても、そう言われて僕に思い出せるのは、レヴィ・シュトロースの『野生の思考』くらいなものです。彼は神話的な思考を、プリコラージュ(がらくた細工)に喩えたり、記号的な思考だと言ったりします。ついでのことですが、記号的な思考の例に出されるのは、ともかくも合理性を旨とする近・現代の思考ではなくて、未開社会や封建社会の思考が多いですね。それはともかく『神話哲学入門』では、フレーザー、デュルケム、マルセル・モス、レヴィ・ブリュール、ケレーニーなど、未開民族や古代の神話を研究した人々に続いて、神話的発想、文化現象としての神話とでも言うべきものを問題にした人々としてカッシーラー、ハイデッガー、ルードルフ・オットー、ブルトマン、ユング、ソレルなどが挙げられています。

『神話哲学入門』に紹介されている本を明治大学図書館の蔵書検索システム(OPAC)で調べてみると、大抵はオリジナルも翻訳もありました。上記

のようなかなり有名な人々の著作だけでなく、註に出ているような比較的知られていない — と思っているのは僕だけかもしれないのですが — 人々の著作も含めてです。特に驚いたのは、ホッホゲザングの『20世紀の神話と論理』のオリジナルがあったことでした。これは『神話学入門』の20世紀の章の最初に引用されている研究書ですが、刊行が1965年と比較的新しいとはいえ、こういう本まで明治大学の図書館にあらうとは思っていませんでした。反対に意外に少なかったのはブルーメンベルクの著書です。これは僕たちドイツ文学・文化関係の研究者の怠慢だと思いますので、早速注文するつもりです。どんな場合であれ、本が図書館にあるということは、職員の皆様の目配りがあったからこそ、先輩の諸先生が注文してくださったからこそなのですから、僕のように人様が買ってくださった本を読んでいるだけではいけないのだと、つくづく反省させられました。神話についてのさまざまな文献でも、オリジナルは外国に注文すれば大半は現在でも買えると思いますが、翻訳は逆に大半が絶版でしょうからとても貴重です。絶対になくさないようにしたいものです。

こんなわけで＜神話＞について一通り勉強しようと思えば、明治大学の図書館に行けばいつでもできることになったのですが、さて、勉強するとなると、未開民族の神話プロパーの話は文学概論にはそぐわないし、神話的発想、文化現象としての神話ということなら、文学概論のトピックスもいくつか拾えそうだけれども、今回は間に合いそうもない… ということになりました。

## 2

ニーチェの『悲劇の誕生』を昨年大学院のゼミで取り上げました。

東西ドイツも統一になり、東ブロックも総崩れになってからというもの、マルクス主義はあまり顧みられなくなりました。勿論、＜現実存在する＞社会主義国家と思想としてのマルクス主義は違うのだから、思想が間違っていて実践されたからといって思想が無意味になるわけではないと、いくらでも言うことはできるのですが、＜今となっては、マルクス主義もねえ＞という雰囲気は如何ともしがたいところがあります。さらにまた、現代

ドイツで言えばギュンター・グラスやハインリヒ・ベルなどに代表されるような政治批判的な文学も魅力を失ってきたようです。これもまた、東ブロックの崩壊の影響かもしれません。というのも、彼らの文学は当然反体制的で、反体制的と言えはマルクス主義と無関係ではありえないのですから。

僕は別段こうした時流に乗るつもりはないのですが、文学を社会や政治との関係だけでなく、生と死、不安など、古典的な問題との関係にまでさかのぼって考え直してもいいのではないかと思って、『悲劇の誕生』を再読する気になったのです。結果は、僕の読み方が悪いのかもしれませんが、いくつか卓抜な個所があるにもせよ、期待はずれでした。リルケの『ドゥイノの悲歌』や『オルフォイスへのソネット』の方が、これからの文学についてずっと多くのヒントをあたえてくれるように思います。もっとも僕は学生時代に、この二つの作品を読もうとして一行も解らず、以来、こんなものが解る人は頭のおかしい人なのだと固く信じていたのですが、60才になった今頃になって、どうして—全面的にはないにせよ—解るようになったのか、自分でも見当がつかないのです。もしかしたら、リルケのテキストを理解するために必要ないくつかの観念や連想がかつての僕の頭にはなかったのが、年とともに補われてきたということなのかもしれません。それがどんな観念で、どんな連想なのかということがはっきり言えれば、リルケ論としても大論文が書けそうですが、残念ながら皆目と言ってもいいほどはっきりしないのです。それはともかくとして、『悲劇の誕生』は、つき合って下さった大学院の学生諸君には全く申し訳ないのですが、僕の読み方がどうもまだ中途半端なようなので、もう少し頑張りたいと思っています。明治大学の図書館の蔵書検索システムで< dionysos >を引いたら20件のヒットがありました。そのうち7、8冊は是非読みたいものなので、先ずそのあたりから作業を始めるつもりです。—冬休みに雑用が入りませんように … リルケは244件のヒットがあり、うち118件が和書でした。洋書、和書を問わず今では絶版になった、貴重なものが多いと思います。『ドゥイノの悲歌』や『オルフォイスへのソネット』をもっぱら論じたものもいくつかありました。それにしても244件とはどなたの功績であろうかと感謝の念にたえません。

### 3

いつだったか、多分、カントとシラーの呆然とするほど進歩主義的な歴史観を読んだ後だったと思いますが、レオポルト・ランケの「いかなる時代も直接神の前にある」という考え方に興味をもちました。この言葉が書いてあるという、『世界史のもろもろの時代 (Epochen) について』(バイエルンのマクシミリアン2世への御進講)も明治大学の図書館で借りられました。1906年に出版された本で、なくしたら大変だとひどく緊張したことをおぼえています。ただ、本の内容は高校の世界史の教科書みたいで、あまり面白くありませんでした。現在では新しい版が、明治大学所蔵のボーズル文庫にあります。

ロラン・バルトの日本印象記『記号の王国』は、日本にはセックス・シンボルは少ない、多いのは消化のシンボルであると言って、パチンコが例に挙げてあったりする面白い本ですが、僕は誰かに進呈したのか、気がついたら手許にありません。その後絶版になったようなので残念なことをしたと思っていたら、明治大学の図書館にはあるのでひとまず安心しました。もっとも今度ロラン・バルト全集が出るようですから、いずれ『記号の王国』も買うことができるでしょう。

マルクスもベンヤミンも言及している19世紀のフランスの大衆小説、ユジェヌ・スュの『パリの秘密』の復刻版を数年前に丸善だか、紀伊国屋だかで見て、その時は多分読まないだろうなと思って買わないで、その後しばらくしてフランス図書に注文したら絶版だと言われました。ところがこの本はオリジナルだけでなく、翻訳も明治大学の図書館にあるのです。翻訳は1929年の刊行で竹村無想庵訳世界大衆小説全集第12巻というのです。翻訳は間違いなく貴重図書だと思います。オリジナルは再び刊行されているようです。

### 4

『便利な文庫の目録』という書誌がありますが、この1969年度版と1999年度版を比較してみると絶版が如何に多いかがわかります。まず、東プロッ

クの崩壊のあおりを受けてか、マルクスについては6点、エンゲルスについては9点絶版です。社会科学では、高校の教科書にも出てくるシェイエスの『第3階級とは何か』も、かの有名なテニエスの『必ずしも面白くはない——『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』も、ヴェーバーの『官僚制』もなくなりました。哲学で絶版になったのはカントが3点、ディドロの『ラモーの甥』と『ダランベールの夢』、キルケゴールが6点の内4点、ショーペンハウアーが11点の内5点、ヒルティが3点で、『眠られぬ世のために』と『幸福論』しか残っていません。文学の絶版も相当なもので、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』の徒弟時代と遍歴時代、シラーの『たくらみと恋』と『ヴィルヘルム・テル』、シュトルムが『みずうみ』を除いて11点全滅、カロッサが8点全滅、ツヴァイクの5点は『マリー・アントワネット』以外全滅、レマルクも4点のうち『西部戦線異常なし』をのぞいて全滅、ヘッセは38点の内14点という具合です。それにしてもかつては、ヴォリンガーの『抽象と感情移入』、格林メルスハウゼンの『阿呆物語』、シェリングの『人間的自由の本質』、シューマンの『音楽と音楽家』、シュニッツラーの『輪舞』、シュライアーマッハーの『宗教論』、ソレルの『暴力論』、ブリュルの『未開社会の思想』等が皆文庫で読めたのですね。漱石を研究するには是非必要な『ケーベル先生随筆集』は、書誌からは消えていますが、クロネコヤマトのブックサービスで調べたら今のところはまだかろうじて入手可能なようです。

## 5

現在ドイツでは東ドイツについての本がかなり多く出版されています。インターネットの通信販売のカatalogをみただけでも、刊行予定のものやビデオなども含めてですが600点以上あります。かつてのような検閲もなくなり、禁制だった資料も多く公開されるようになったからでしょう。東ドイツは半世紀続いた社会主義の実験の一つなのですから、その実状がどういうものであったのか、どこに矛盾があったのかをしっかりと記録しておいてほしいと思います。ただ心配なのは、これらの本の大半はやがて絶版になってしまうのではないかということです。ドイツでも東ドイツへ

の関心は高いとは言えません。失敗した社会主義のことなど考えても未来の役には立たないということなのではないでしょうか。東ドイツについての本は—少なくとも図書館には—今のうちに買って置かなければと思うのですが、将来、誰も読まなくなったそういう本を読んで何か書いて、やはり誰も読まないということになると…いや、そんなふうにはばかり考えなくてもいいのかもしれませんが。東ドイツのことをはっきり知っていないと、アンゲロプーロスではありませんが、形を変えて東ドイツと同じ失敗をそっくりそのままどこかの国で繰り返すかもしれないのですから。

## 6

コンピューターのおかげで本へのアクセスが随分便利になりました。自宅でも明治大学の図書館の本を探せますし、そこに無ければ他大学の図書館も、公共図書館も探すことができます。以前のように図書館に行ったらじめて本がないことがわかり、あちこち図書館を駆けずりまわるということがなくなりました。ただ、折角見つかった本でも借りられるとは限りません。だとすれば図書館相互のネットワークをより緊密なものにすることが必要だと思います。現在明治大学の図書館も参画している山手線沿線の大学の図書館のコンソーシアムの意義はいくら強調されても足りないのではないのでしょうか。

最後に、こう絶版の多い時代になると、図書館で古書を買う比重を高めることも一つの方法かもしれません。だがそうは言っても、新刊書の点数も増加の一途を辿っているわけですからなかなか難しいとは思いますが。